

五輪の街 ロンドンは今

英国栃木県人会エッセー

〇6〇

宮田 華子

ロンドン五輪目前、多忙を極める五輪推進委員会。ある日、五輪会場内の祈禱所がメッソカの方向を向いてないことが発覚！アルジェリアがボイコットを示唆してきたからさあ大変…。

もちろんこれは実話ではないのでご安心を。BBCで放送中の人気ドラマ「トウエンティ・トゥエルヴ」のエピソードだ。五輪を運営側から見たコメディーだが、タブー視されがちな宗教問題を

多文化共生の中で

正面から取り上げ、笑いのネタにしている。その大胆さに日本人感覚では驚くものの、英国ではそのくらい身近でオープンな話題とも言える。

金髪の紳士が街を闊歩し、午後は優雅にアフタヌーンティを嗜む。そんな英国へのイメージはこの国に来て1カ月で覆された。英国は昔から移民を多く受け入れてきた多文化共生の国である。特にロンドンはBAME(黒人、アジア人、

ロンドンの目抜き通り「オックスフォード・ストリート」。さまざまな人種の人たちが街を歩く



マイノリティーエスニックの割合が高く、人口800万のうち、270万人がBAMEに属している(大ロンドン市調べ)。

教徒らの姿は日常の一部であり、一見外国人に見える彼らも英国人である。モスクやシナゴーグに通い、母国の言語や食の伝統を守りつつも、皆同じカフェでくつろぎ、スーパーで買い物をする。近年の極右の台頭や多民族国家ゆえの問題も多々あるが、これも英国のリアルな姿である。

今回のロンドン五輪はイスラム教の断食期間「ラマダン」と重なっており、ムスリム選手への不利は否めない。しかし運営委員会(LOCOG)は断食中の選手への配慮を怠らない。多文化多民族の街が世界の人々を迎える大イベント。ロンドンだからこそできる温かく柔軟な歓迎にも期待したい。(第1、3月曜日掲載)

手への深夜の食事提供等、さまざまなケア策を早々に打ち出した。過去には映画「炎のランナー」のモデルとなったエリック・リデルら、宗教と競技にまつわる問題には経験がある英国。運営委員に各宗教者が含まれ、多様な文化的背景の選手が集う大会を支えている。

大会運営、宗教にも配慮



みやた はなこ 小山市出身。2002年に在ロンドンメディア

会社に就職。その後、日系映画製作会社・英国法人勤務を経て、11年からフリーライター&編集者。日本の雑誌に英国や欧州についての記事を執筆している。ロンドン在住。